研究雑話(45)

人間発達の物質的基礎(九)：脳のなかの内なる他者、もう一人の自分との対話＝自我の形成

藤井力夫

前回は、「なんだろう」と止まるときの定位反射の発動機序についてお話しました。場面や状況を短期記憶する海馬体ー視床前核群系。快いものなのか否かを評価する扁桃体ー視床背内側核系。

これらは場面や状況の違いで反応し、快・不快を基準に評価する。これはまわりの世界に対する認識が我々自身の興味や関心抜きには成立しないということを意味しています。「好きこそものの上手なれ」といわれるゆえんです。【脳内革命】(春山)という本がベストセラーで、エイ・テン(A10)神経という中脳ドーパミン作動性神経の存在と役割が注目されています。このエイ・テン神経は快に対して脳内ホルモン(βーエンドロフィン)を産出し、伝播する神経で、経路は中脳から海馬や扁桃体近辺を経て前頭葉に至るものです。

今回は、この快に関係して、食欲などの生理的なレベルだけでなく人間としての誇り・承認や自己実現、これら自体が快になっていく過程についてお話したいと思います。これはまた自我の形成過程でもあります。

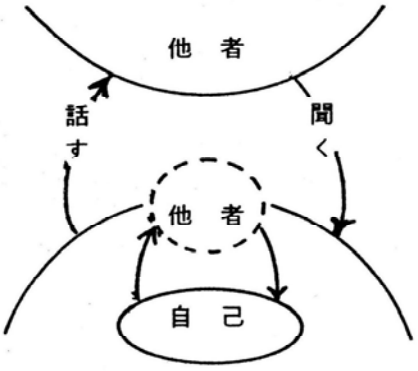
「脳のなかにできる内なる他者」。「脳におけるもう一人の自分との対話」。これについてお話したい。まず、図Aを見ていただきたい。他者がいて自己がいる。他者はこの場合、母親などの大人。目と目があって声を出すようになり、お母さんの反応を受け取ります。そして見ただけで期待するようになります。お母さんという他者が来れば期待がかなえてもらえる。この繰り返しのなかで、目の前にいなくても脳の中にお母さんという他者が存在し、位置づくようになる。保母さん、友だちと交渉のなかでどんどん他者の存在を脳のなかに取り入れていく。この過程で図中の「他者」は点線から実線になり「もう一人の自分」へと発展していく。そう思います。

図Bがその過程です。「イナイイナイバー」をやってもらうだけでなく、自分の方からもする。これはされる方から、自分自身がその「他者」になるということです。鬼遊びのような交替遊びもそうです。追っかけられるだけでなく、自分自身も鬼になるということです。現実の他者のいない一人二役遊びや一人二役対話。脳のなかに他者を想定して自己と他者の関係を展開しているのです。二才児、三才児の姿です。

これが、四才になるといっそう明確になります。こうありたいという「自分」を脳の中に描くことができるようになるわけです。「兄ちゃん」のように強くありたい、トンボを捕まえてみたいなど。「兄のように」という「もう一人の自分」を脳のなかに介在させることができるのです。また、食べたいけれどもみんなが揃うまで待つことができる。これも同じです。脳の中の「もう一人の自分」と対話しながら行動する。しかしまだ脳の中の自分と黙って向き合うことはできません。黙って考えることができるようになって明確な「もう一人の自分」を対峙できます。「自立」、ないし自我の形成とは相談相手を自らの脳のなかにつくるということでもあるのです。

(北海道教育大学教授)

A. 内なる他者(もう一人の自分)の形成シェマ図



B. 内なる他者(もう一人の自分)の形成過程

- 0ー3カ月：授乳や姿勢の生理的要求による条件づけ
- 3ー12カ月：目でとらえて微笑む。声を出し返す。人見知り。要求が叶い泣き止む。見返る。もとの遊びに戻ることができる。チョウダイに反応できる。
- 1ー3才児：イナイナイバーを交互にやって遊ぶ。チョウダイなどことばを使って手渡しを交互にする。鬼などの交替遊び。一人二役遊び。一人二役対話。だだをこねる。まるを描き、大人、友だちを表す。
- 3ー6才児：小さい子どもをいたわる。できるようになったことを誇りに思う。モデルとなるお兄ちゃんをまねようとする(内なる他者)。ごっこ遊び。順番を待てる。物語の聞き取りでイメージを描ける。
- 6ー12才：周囲の世界を理解すべく概念で整理。聞き写しが可能。人における多様な感じ方を理解。
- 12才以降：宇宙を抽象によって多義的に理解。自己の人格世界の確立。矛盾する感情世界を対象化。